

## 曙を迎えるために

2010年1月1日

ライフワールド・ウォッチセンター長  
増田 優



ライフワールド・ウォッチセンターは2003年に発足以来6年半が経過した。その間設立趣旨を踏まえ、そしてライフという名称に因んで「生命」、「生物」、「生活」、「人生」の4つの視点に「生存」の視点をも加えて5つの「生」の視点から現代の社会と世界の動向を見据えつつそこで起こる諸々の事象を検証し社会に積極的に発信してゆくことを新たに理念として掲げてきた。

また、社会における連携の結節点として機能するという設立趣旨に沿いつつ広範な分野の人々

との輪を広げていくため、「互学互教」の精神のもと「現場基点」を念頭に「社会学連携」を旗印として実社会に根ざした「知の世界」の構築を目指して人々が自己研鑽と自己実現のために自立的に行き交い自律的に集う場を形成することを具体的な理念として新たに掲げてきた。

こうしたふたつの新しい具体的な理念の下お茶の水女子大学内においては、安全管理に関する基礎講義科目や社会技術革新学に関する科目のほかリベラルアーツ教育の一環として生活世界の安全保障に関する科目を担当するなど学部教育に携わるとともに、化学物質総合管理に関する科目など大学院教育に係わってきている。そしてこの間にも、ライフワールド・ウォッチセンターの活動は社会に大きく広がり、お茶の水女子大学の枠を大きく超えて展開している。

例えば研究面においては、化学物質や生物のもたらすリスクを管理するために必要な法律体系の整備や人材の育成などの能力強化(Capacity Building)に関する調査研究及び技術革新と社会変革の関わりについての調査研究などを展開してきた。そして、化学物質総合管理に関する産業、政府などの各セクターの能力比較を行いその改善点を指摘するなど社会に対して数多くの発信をしてきた。そして、2004年に化学生物総合管理学会をそして2006年に社会技術革新学会を発足させ、論議と発表の場を拡大して人々の輪を広げてきた。

教育面においては、現代の社会と世界の動きを理解するための広範な知識を備え社会においてそれぞれの立場で役割を果たす人材を育成するために必要とされる学習の機会を提供することを目指して、「知の市場(FMW: Free Market of・by・for Wisdom)」という総合的な教育活動を展開してきた。「知の市場」は、自立的で開放的な協働関係を形成しながら人々が自己研鑽と自己実現のために立場を越えて自ら活動する場(Voluntary Open Network Multiversity)であり、総合的な学習機会の提供、実践的な学習機会の提供、十分な情報提供と受講者の自己責任による自由な科目選択、大学・大学院に準拠した厳しい成績評価という4つの基本方針のもとに活動を展開している。

知の市場の活動は社会の強い支持を受け、2004年度から2008年度までの5年間に数十に上る開講機関や連携機関との協力の下、1731名の講師陣の参画で221科目を学生・院生を含む社会人向けに開

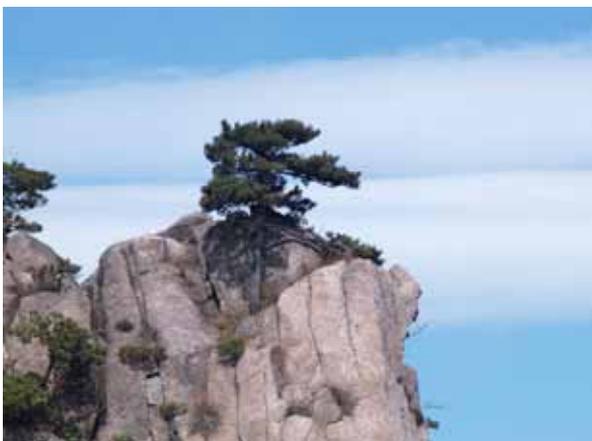


講して 6017 名の応募者を得た。2009 年度は単年度で 550 名の講師陣の参画により全国 18 拠点で 102 科目(1 科目は原則 120 分授業 15 回で 2 単位相当)を開講し 4000 名の受講者の参加を得た。知の市場は社会の中においてこれまで疎遠であった組織と組織の新たな協働関係を構築するとともに、分野を越えた人と人の新鮮な出会いを創り出し人の輪を全国に広げている。2010 年度はさらに全国に展開を広げ、全国 32 拠点で 108 科目相当を開講する。

しかしこうした成果は束の間の些細な結果に過ぎない。世界の状況は激しさを増している。日本のおかれている状況はそれにもまして厳しく大きな転換点にある。生活世界の安全保障を考える上で、化学物質のもたらすリスクを如何に管理するか、或いは食品の安全をこれまでも増して如何に確保してゆくかと言ったことも重要であることに異論はないが、それに先駆けて、食料安全保障を心配し、資源・エネルギーの確保に心を砕き、そして何よりも人々が生活の糧を得るための術、即ち職業の確保、社会の国際競争力の向上、技術革新と社会革新の促進などについて真剣に思いを巡らさなければならない状況に立ち至りつつある。

特に、否応なしに次の時代を生きてゆかねばならない若い人々に、世界の怒涛の中で生きていく能力を身につける機会を設けることは何よりも重要な課題である。それが許されるならば、おナゴヤカナ風土の中の管理された環境の下に身をおき、目に入れても痛くないほどの温かい庇護のもとに端正にな形を保ちながら寄り添うようにして生きていくのもひとつの道である。しかし世界の動向はこれからの世界を生きてゆく人々にそれを許すとは限らない。荒々しい岩山の上にすっきりと独り立ち上がる人生をも楽しめる教育をする必要がある。

江戸から明治へ、藩という地域(Local)体制から日本という国家(National)体制に変動した。その際、その激変の中で、藩校という当時としては世界の中でも優れた教育体制は時代の流れに取り残され崩壊してゆき、今日まで続く大学大学院制度にその地位を譲った。20 世紀の第 4 四半期から社会の体制は世界が連動して動く Global 体制に急速に移行し 21 世紀にはそれが定着していくことは間違いない。実社会はそうした動きを先導しており、国家や政府がそして残念なことに大学大学院がその現実を追いつける状況が現出している。



こうした中で教育体制も大きな変革を迫られている。Global 体制を先導し得る教育体制、社会と世界の現場の動きと協働できる教育体制へと変革しなければならない。それなくして藩校の体制が次の時代を担えずに消えていったと同様のことが今日の大学大学院に起こりえる。現場から遊離したがゆえに弱体化した教育体制を再構築することが不可欠である。新たに掲げたより具体的な理念の下で、ライフワールド・ウォッチセンターがこの時代の転換点において多少なりとも役割を果たし、曙を迎えられることを祈念している。